慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	武田勝蔵著, 明治回顧 宮さん宮さん
Sub Title	K. Takeda, The Miyasan Miyasan : Meiji memoirs, Chigasaki 1969
Author	松本, 信広(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.42, No.3 (1970. 2) ,p.87(351)- 88(352)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700200-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

武田勝蔵著 明治回顧 宮さん宮さん

（昭和四四年九月一日刊）

松本信広

著者は、私と同じく大正九年の本塾史学科出身で「史学」の創刊当時しばしば興味ある論文書評等を寄せて援助されたばかりか、その後も影となり日向となり三田史学のために尽されてきた。父君尚君は、朝鮮と我国との間に介在して永い間両国修好のかすがいであつた宗家に仕えた家の出で、明治政府の通訳官、翻訳官、宮内事務官等を歴任し、明治十五年朝鮮事変遭難者の一人として知られていた。そういう関係で著者の対馬とか日鮮交通史に関する造詣は当時の私共にとつて金玉であつた。塾卒業後宮内省図書寮に勤務されたが、其後各宮家、済生会、学士院、塾等の歴史編纂にたづさわれ、傍ら武蔵工大に教鞭をとられた。本書は、氏が勤務の余暇に折々筆にされた修史の余瀝の中明治以降の事項に触れたものを集録し、明治百年の記念とされたもので、氏の編纂に関係された各方面の歴史事項が多く、史料の研鑽に堅実な著者の蘊蓄の片鱗がうかゞわれる。たとえば明治二三年我国に来朝したトルコ国使節オスマンパシャを乗せたエルトグロル号が紀州沖で難破した際の顚末は、内藤智秀博士の「日土交渉史」（昭和八年慶大文学博士学位論文）の中に精細に記述されているが、その時生存者を載せてトルコに送り届けるのに軍艦比叡と金剛とをもつてしたことは実に有栖川宮威仁親王の上表によつて実施せられたという一事の如き、同書に記載されず、著者によつて初めて周知せられた所である。十九篇総じて此種の珍しい記述に富んでいる。殊に明治年間皇室を輔翼して功労のあつた各宮家に就ての記事は、今日の世態に於て見過し勝ちにされているだけに将来私共の知識の欠を補うものとなろう。

筆者は最近海外にあつて日本人の慈善事業に関心の薄いことを痛感した。香港に訪れる何十万の日本人の旅行者は土産物の購入に狂奔しているが一人として生活に苦しむ難民や蛋民の為慈善の金を投ずるものがいない。天性他人のことにつめたい吾国民に対し、欧州王室にならい慈善事業を育成するのに努力された皇室及び皇族の事跡を後世になつてそのねうちが正当に評価されるものであろう。本書中に皇后、皇族妃の関係された東京慈恵会や明治帝の御意志にもとづき生れた済生会等の記述があるが、支配者が臣民に対し仁慈（ビネボレント）でなければならぬという原則は少くとも明治大正時代に於て之を守ろうとする努力が払われた。却て戦後の民主政体治下に於て実力者階級は此点について及ばざる点があり、衣食住に民の怨嗟を招いてはいないだろうか？　いろいろの意味から本書は私共に教訓を与えて呉れる読物であり、是非江湖の一読をすゝめたい。（本書は限定自費出版につき、神

奈川県茅ケ崎市東海岸南一ノ一一ノ一六の著者に直接申込まれたいとのこと、実費五五〇円）

小野勝年著
入唐求法巡礼行記の研究　四巻
（鈴木学術財団　昭和三十九年二月―四十四年三月　刊）

尾崎　康

小野勝年氏の入唐求法巡礼行記の研究が五年がかりに完結した。合計二千頁をはるかに越える大著で、慈覚大師円仁の入唐求法巡礼行記とおなじく四巻四冊に分かち、その本文に綿密な校訂を加え、精細な訳注を施したうえに、第一巻巻頭には円仁の旅行、見聞、求法全般の概観（慈覚大師の入唐巡礼）が、第四巻末にはこれら諸問題に関する長篇の研究（入唐求法巡礼行記の研究）が附されている。第一巻刊行の直後に石田幹之助氏が称讃されたとおり（朝日新聞昭和三九年七月六日書評）、内外のあらゆる註釈、校勘、飜訳を凌ぐすぐれた業績である。

円仁の入唐求法巡礼については、行記の古鈔本が明治中葉に東寺観智院で発見されてから、着々と研究が重ねられ評価されてきた。テキストにしても、夙に続々群書類聚（第一二巻・一九〇七年）、大日本仏教全書（第一一三冊・一九一八年）に飜印され、東洋文庫で精巧なコロタイプ版の影印が行われ（東洋文庫論叢第七・一九二六年）、その間にいわゆる池田本が紹介され（四明余霞第三二九号・一九一四年）、また堀一郎氏の全訳もでている（国訳一切経史伝部第二四・一九三五年）。しかし、この学界や仏教界の一部での地味な研究や評価が、一躍脚光を浴び喧伝されるまでにいたったのは、ライシャワー氏が英訳註（Ennin's Diary―The Record of a Pilgrimage to China in Search of the Law, New York, 1955）と研究（Ennin's Travels in T'ang China）の労作を完成されたのが根幹であるが、その氏の駐日大使赴任というきわめてジャーナリスティックな原因によるものであった。これは、その後者がただちに飜訳され（田村完誓訳・世界史上の円仁―唐代中国への旅・一九六三年・実業之日本社）、行記本文の部分訳、解説等が、現代語訳・普及版の古典日本文学全集（堀一郎訳・第一五巻仏教文学集・一九六六年・筑摩書房）や、日本の仏教（壬生台舜著・第三巻叡山の新風・一九六七年・筑摩書房）という一般向けの叢書にも大きく採りあげられたことと、田村氏訳書の邦題名とに象徴的である。

このようなわけで入唐求法巡礼行記は広く知られるようになったが、それにしても円仁の旅行は承和五年から十四年（唐開成三年―大中二年・八三八―八四七）とあしかけ十年の長期にわたり、揚州から山東、五台山、長安等を紆余曲折してめぐつて、その見聞はあまりに多面におよぶ。たとえて挙げてみても、承和遣唐使をめぐる諸事情、揚州の僻村に漂着してからのその行路の地